
忘却の罪

裏音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

忘却の罪

【Nコード】

N9116G

【作者名】

裏音

【あらすじ】

夢で聞こえた声。そして何かを忘れたかのような違和感。そんな感覚に襲われた彼だったが、思い出そうとすれば頭痛が起こり、思考が邪魔されてしまう。失くしてしまった大切なもの。忘れてしまった大切な人。思い出せばそれは、彼の罪を思い出させてしまうこととなる。

貴方は私を見てくれていた？
貴方は私を、私として見てくれていた？
貴方はちゃんと、

私の存在を覚えていてくれた？

暗闇の中から聞こえてくる声。

すごく、懐かしい声なのに、思い出せない。
大切な、誰か。忘れてしまったのか、失くしてしまったのか。それとも…？

『絶対に忘れないでね』

何故かその言葉は、少しばかり恐怖を感じた。

朝。頭に言葉が木霊する中、彼は目を覚ました。
カーテンの隙間から薄っすらと日差しが入り、夢の声で起きなくても、そのうち日差しでおきてしまうような。
窓が少し開いており、そこから暖かい風がはいる。カーテンが、小さく揺れる。

「誰…だ…？」

目を覚ましてすぐ、自分自身が誰かも忘れてしまった気がした。何か大切なものを、忘れてしまった気がした。
こういうような夢は随分前に何度かあった。原因はよくわからなかったし、その前に昔のことをよく覚えていない。
思い出そうと、思考を廻らせる。何かを、何かを忘れてしまっているのなら、必ずヒントとなるものが記憶に残っているはず。

そう思い、考えてみるのだが、
「っ……！」

途端、鋭い痛みが後頭部に走り、思考が中断した。そして、痛みは数秒間続き、その間、完全に思考は停止してしまった。

「……あれ？ 俺、今何考えてたんだろ……？」

頭痛が消えると、彼は今考えていたことを忘れてしまっていた。思考が停止どころか、考えていたことがわからない。

何を考えていたのか。どんな夢を見たのか。何かを忘れてしまったことを、忘れてしまったのだ。

見た夢も、声も。全て。

彼は社会人で、フリーター。仕事をしようにも、やりたいことがなく、ぜんぜん見つからない。

しかも不思議なことに、高校時代のとある時期の記憶だけが、ほとんどあいまいで、わからない。

ただ忙しすぎて、よく覚えていなかったのかもしれないと彼は納得したつもりだが、心のどこかで、納得できない何かがあった。

今はバイトをしながら、のんびりとすごしている。

数日経ったある日、彼は街角で一人の女子高生をナンパした。ナンパは昔からあまりしないのだが、

あまりにも暇なため、ちよつと声を掛けてみたのだ。

すると案外簡単に引っかけたり、お茶に誘うことができた。

「ねえ、君名前なんていうの？」

どこか適当な喫茶店に腰を下ろすと、注文したコーヒーをすすりながら、女子高生に顔を向けた。

女子高生は、黙ったまま、窓の外を見ている。

「彩。西条、彩」

女子高生、彩は、そう簡潔に答えると、メロンソーダを飲んだ。そして、視線を彼に戻した。

「ねえ、君って彼氏とかいる？」

調子に乗ったように、彩に聞くと、彩はぴたりと手を止め、黙ってしまった。

「あ、ごめん。何か気に障ること言った？」

「別に。先に貴方の名前も教えてよ」

確かにそうだと、彼は自分の名前を言おうとしたが、

「…あれ、なんで？ 自分の名前なのに…」

思い出せない。自分の名前が。そういえば、最近自己紹介なんかすることもなかったし、自分の名前に触れることもなかった。

「忘れた？それとも、失くした？」

「…貴方に、彼女はいた？」

「え、俺に？ えーっと…」

これもまた、思い出せない。いた気もするが、それが誰で、いつ出会ったのか。思い出せない。しかもそれは全部、あいまいな高校生活の記憶だ。

「忘れたの？ 忘れてしまったの？」

何故だか、彩の音が耳に、脳に響く。嫌な音がする。

「本当に、忘れてしまったの？」

声が鋭くなり、脳に直接響くように聞こえる。頭が痛くなった。

「許さない。忘れるなんて、許すものか！」

たくさんさんの声が混じったような声で、彩は彼をにらみつけた。その顔は、見ていて気持ち悪くなるような、

おぞましい顔だった。

そしてそれを最後に、彼の意識は、深い闇へとゆっくりと沈んでいった。

「起きて。起きてよ、」

女の声に、意識が戻る。だが、女の声が最後まで聞き取れない。

「起きた？ 、ずっと寝てたんだよ」

言葉が、聞こえない。誰だろう。聞こえない部分には、何が入るんだろう。

そんなことを考えながらも、意識はだんだんと覚醒していった。

体を起こし、周りを見る。あたりは暗く、自分と、女しか見えない。

「君は…誰？」

恐る恐る女に声をかけた。女は透き通るような瞳で、彼を見つめ、そしてこういった。

「私を見て。私を忘れないで」

「君は…」

だんだんと記憶が蘇り、記憶の中にある、崖の上の女と、目の前の女の姿が重なる。

「うぐっ…」

あと一押しで蘇る記憶が、寸前の所で頭痛により阻まれた。あと少しなのに。彼は、手が届かないようなもどかしさに襲われた。

苦しそうに頭を抑える彼に、女は、

「忘れさせない。絶対に、貴方に私を忘れさせたりするものか！」

口調が強くなり、女は彼の首に手をかける。恐怖が、思考を駆け巡る。

「忘れてしまったのなら、地獄を巡りながら思い出させてあげる…」

「！」

女の手に入力が入った瞬間、彼の脳裏に記憶がフラッシュバックする。

『まっつてよ彰』

女と、男。二人が海岸沿いに歩いている。女は少し足元がおぼつかなく、男に追いつけない。

『さっさとついてこいよ』

女なんかお構いなしにと、どんどん先へと進む。

二人は崖を上り、一番上までと上る。そして、波立つ海を眺めた。

『ねえ、彰。お互いに、絶対相手のことを忘れないようにしようね』
女が男に抱きつく。

『勿論だよ。絶対忘れない』

男も、女を抱きしめ返す。

『私たちに、永久の愛を』』

二人はそう叫び、崖から飛び降りた。

『ありがとう、彰』

『ありがとう、沙奈』

最後に見た景色は、青い空だった。

「思い出した…沙奈、か。沙奈なのか？」

既に女の手は首から離れ、男に抱きついている。

「そうだよ、彰。あのあと彰は、死んだ私を差し置いて、一人岸まで泳ぎきった…」

そう。思い出した。あの後自分は、岸へと泳ぎきり、近くの漁師に助けてもらったのだ。

だがその後、彰は罪の意識にさいなまれ、毎晩苦しんだ。

女、沙奈の抱きつく力が強くなる。

「一人で生きたばかりか、約束を破り貴方は私の記憶を封じた！」
記憶を封じた。それで、全ての説明がつく。高校生活があいまいだったのは、記憶を封じたからだだった。

沙奈の腕に力が入り、抱きつく、という領域を超え、彰の体を締め上げる。

「あつ、がつ…！」

口から血を吐き、苦しそうにする。だが沙奈は力を緩めようとしな
い。その瞳は、憎しみと、悲しみに覆われ、正気ではなかった。

「沙、奈…ゆるされないのはわかっ、てる。だけどっ！」

彰は力を振り絞り、最後まで言葉を紡いだ。

「俺がお前を愛してることにっ、変わりはない！」

「彰…」

沙奈の力が緩まった。その隙に沙奈から離れると、彰は口元に流れる血をぬぐい、沙奈に向き直る。

「沙奈…忘れていたことは本当にすまないと思ってる。罪悪感から、記憶を封じたことも否定しない」

沙奈は何も言わない。否、何もいえないのだ。言葉が出てこない。「けどな、俺はお前が好きだった。無理心中を持ちかけられても、断らなかつた」

うつむく沙奈を抱きしめ、言葉をつなげる。

「でも、体は死を受け入れられなかつたんだよ。死ぬことが怖かつた」

「私だつて、怖かつた。でも、彰がいたから……！」

沙奈の瞳が、正気に戻った。今の沙奈の瞳には、罪悪感が残る。

「ごめん。今この罪が、この命で償えるのなら、俺はその身をもつて償おう」

ゆっくりと、沙奈の手を自分の首に添える。

「さあ、俺の命を取れ。それで償える罪ならば、俺は躊躇しないし、もう、逃げない」

覚悟したように、沙奈の手を強く握った。薄っすらと痕が残った。

「できないよ……彰を殺すなんて、できないよ」

涙を流す沙奈、だがその言葉を聴かなかつたかのように、彰は目を閉じた。

彰の意識は、黒と白のモノトーンの世界へと流された。

ぽたりと、水が落ちてきた。

頬に伝うのは自分の水。

じゃあ、落ちてきたのは、誰の水？

瞳は開かないで、声だけを聞く。

そして、二人で紡ぐ言葉。

「私たちに、永久の愛を」

今度こそ本当に、永久の愛を。

そう、誓った。

それから一ヶ月。彰は、毎日彼女の墓参りをしている。毎日花を沿え、彼女の好きだった食べ物添える。

少しでも自分の罪を、償うために。

彼女は自分を殺さなかった。それは、多分彼女の中に、自分を愛する心があったから。

「でも、俺がしたことは…許されることじゃない」

だからこそ、こうして必死に償いをしている。

別に罪が全て消えるとは思ってない。けど、少しでも償えれば…。

そう思ってたことだった。

「なあ、沙奈。お前は今、どこにいるんだ？」

空を見上げ、そう問いかけた。

答えが帰ってくることはないのに、なんだか、沙奈の声が聞こえた気がした。

空は、あの時と同じ、青い空だった。

FIN

（後書き）

初めまして。ここでの投稿は初めてになります。裏音^{りおん}です。

最初は普通にホラーを書いていたのですが、最終的には恋愛になりました。

ここまでくると、ホラーか恋愛かでちょっとジャンルに迷います。

こんな文章でも読んでくださりありがとうございます。まだまだです。精進します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9116g/>

忘却の罪

2010年11月20日03時44分発行